



カリフォルニアの風

サンフランシスコ日本語補習校 令和元年12月号

大切にしたいこと

11月の感謝祭、12月のクリスマス、そして家族みんなで新年迎えるお正月。地球の北半球では1年間で最も日が短くなるこの時期に、多様な社会の中で人や自然や八百万の神々に感謝する行事が営まれます。植物が実を結ぶことで、収穫の喜びを多くの人たちと分かち合い、謙虚に感謝する心をもつことは、国や宗教を越えた人として大切な感性ではないかと思えます。米国の学校と補習校での学びを積み重ねている子どもたちは、多様な文化に触れる機会に恵まれています。補習校では日本語で日本のことを学習していくわけですが、ご家庭でも保護者の皆様が外国で暮らしながら感じ考えたことを、子どもと交換し合うことで体験的な学びが生まれ、豊かな感性を育むことになると思います。

季節は秋から冬へと移り変わろうとしています。広葉樹のシイやカシが実をつけ、落葉した葉を踏みしめつつ幼小部サンノゼ校の子どもたちは12月21日の特別授業に向けた練習を行っています。学年での練習は、日を追うごとに熱を帯びてきました。



各学校では、今年度の学習の成果を発表する取り組みや、次年度に向けた説明会など学校の実態に合わせた活動が行われています。

先日、経済協力開発機構（OECD）が2018年の夏に実施した、国際学習到達度調査 PISA テスト（対象は15歳・日本では高校1年生）の結果が公表されました。この結果では、数学的応用力や科学的応用力では世界79カ国の中でも上位を維持していましたが、読解力で15位と順位を落としたそうです。PISA の求める読解力は、文章を読み解くだけでなく、理科や社会などの学習全体の中で育てていくことが大切だと言われています。

<毎日新聞「余録」より>

明治初めに東京外国語学校のロシア語教師だったメーチニコフは、休暇の大部分を「この街のどこでも見かけるおびただし数の書店で過ごすことになった」と記している。（「回想の明治維新」岩波文庫）書店ではよく若い娘が熱心に本を読んでいる姿を見た。好奇の目で見てみると、娘たちは笑いながら大衆小説本を見せてくれた。ロシア人には庶民の娘が本を読む姿が珍しかったのだろう。彼は人足や召使（めしつかい）たちについても書いている。

「彼らがみんな例外なく何冊もの手垢（てあか）にまみれた本を持っており、暇さえあればむさぼり読んでいた。彼らは仕事中は本を着物の袖やふところ、下帯つまり日本人が未開人よろしく、腰に巻いている手ぬぐいの折り目にしまっている。」

少し前の江戸には貸本屋が800軒もあったから、記述はあながち誇張ともいえまい。その本好きで外国人を驚かせたご先祖をもつ私たちである。なのに本を読まない人の割合が書籍・雑誌双方で読む人より多かったとの調査結果だ。小社の第71回読書世論調査である。不読率が読書率を上回ったのは書籍で11年ぶり、雑誌で5年ぶりという。これは一時的現象か、それとも活字離れが一段進んだのか。気になるのは、マンガを読む若い世代も減ってきていることだ。日本の高い識字率よりメーチニコフを驚かせたのは、明治の庶民が読書で得られる教養や文化に心底まじめな敬意を抱いていたことだった。さて、日本人はどう変わったのか。

日本国内では若者の活字離れが進んでいると言われていますが、海外で生活する子どもたちは意識しない限り日本語に触れる機会を確保することはできません。お陰様で本校では、保護者会の方々のご協力で、図書の貸し出し活動や古本市の計画・運営など、子どもたちに多くの読書機会を与えてくださっています。本当に感謝しております。

クリスマスや年末年始の時間の過ごし方の中に、ご家庭でお互いの読書について語り合う場面をもつことができれば、素敵な時間が過ごせるのではないのでしょうか。